

原典翻訳・注解 G・ボッテロー

『国家理性論』序文並びに第一巻

第一章～第一〇章

石 黒 盛 久

【はじめに】

以下に訳出並びに注解を試みたのは、16世紀後半イタリアで活躍したイエズス会司祭にして政論家ジョバンニ・ボッテローの主著『国家理性論』全10巻（1589年ヴェネツィア刊）の序文及び第一章である。ボッテローの『国家理性論』はマキアヴェッリの『君主論』を批判的に継承し、17世紀絶対主義国家のひいては近代主権国家の指導理念となった「国家理性」(ragion dello stato)理念を大成した書である。ボッテローのマキアヴェッリ批判の要点は、マキアヴェッリにおけるソフト・パワーの軽視という点に集約できよう。

マキアヴェッリと同様ボッテローもまた、国家の臣民支配にあたり暴力や権謀の如きハード・パワーが必要であることを否定する者ではない。だがそれと並びあるいはそれ以上にボッテローは、宗教を根底に据えた道徳や慣習、教育といったソフト・パワーの臣民支配における有効性を強調する。また重商主義の時代に相応しく、彼がマキアヴェッリが無視した国家の経済的側面に着目した点も見逃せない。従来、彼をはじめとするイエズス会系政論家によるマキアヴェッリの批判的受容は「タキトゥス主義」とも称され、対抗宗教改革期のカトリック教会によるマキアヴェッリ弾圧の下でマキアヴェッリ思想を継承するため、無意識に選択された思想的カモフラージュと解釈される場合も多かった。だがそもそも『君主論』の想定する権力の主体がチェーザレ・ボルジアに象徴される「新しい君主」であったのに対し、ボッテロー

の想定するその書の読者が安定した既存の国家の君主であったことが、こうしたスタンスの違いに帰結したとも考えられよう。

現実にはマキアヴェッリの場合についても、安定した既存の共和国を議論の俎上に上げる『ディスコルスイ』においては、そうしたソフト・パワーの必要は決して無視されてはいない。マキアヴェッリを単なる反道徳的権謀術数の徒ととらえる見方が、宗教改革期の読者の党派的偏向に基づく誤読に過ぎないことが、今日明らかにされつつある。既存の国家の枠内でボトム・アップ的に形成されるソフト・パワーにより、政治的リーダーがトップ・ダウン的に行使するハード・パワーを抑制するというバランス感覚によってボッテローの思想は、図らずもマキアヴェッリの思想を最も正確に読み解き、以後の欧州の近代国家のあり方の見取り図を示したとも言えよう。

今日の国際政治学においても、政治の本質をむき出しのハード・パワーの行使に求めるリアリズムの傾向とソフト・パワーの機能を評価するイデアリズムの傾向は、二大潮流として依然拮抗し合っている。支配的超大国が失なわれた現代の世界政治において、両者間の論争の行方は一層その重要性を増すものと考えられる。このような現代政治と政治思想の状況においてボッテローの『国家理性論』の再検討は、かかる論争の成熟に貴重な一石を投じるものであろう。今回は紙幅の関係上本書の冒頭、序文及び第1巻第10章までの訳出に留まらざるを得なかったが、本稿と平行して刊行される『金沢大学学校教育学類紀要』第6号に第11章以降の訳稿を掲載し、二巻以降についても以後訳出を継続する予定である。

威勢嚇々たる恭敬あたわざる我が主にして、

至尊なるザルツブルクの公爵大司教等々なる

ヴォルフアンク・テオドリコ殿下に捧ぐ¹

¹ 1587年から1612年の間にザルツブルクの公爵司教の地位にあった、ヴォルフ・フリードリヒ・ライテナウのこと。ザルツブルクの小ローマ化を目指し専制政治

この過去数年私自身のそしてまた私の友人たちの、はたまたわが主筋の方々の諸々の事情により小生は数多度の旅行を行い、かつまたアルプスの彼方此方の王や諸侯の宮廷にて交渉ごとを行うことを余儀なくされて参りました。そこにおきまして小生が見聞きしましたことの中でも驚き入ったことは、日毎に国家理性について語られるのを耳にし、而してかかる事柄につき、ニコロ・マキアヴェッリやコルネリウス・タキトゥスの名が引用されることでもございました。前者について言及がなされるのは、彼が統治と人民の政体につき教訓を与えるからであり、後者について言及がなされるのは、皇帝ティベリウスがローマ帝国においてその地位に昇りまたその地位を守ったその手法が、彼により生き生きと描き出されているからに他なりません。そこから小生は〔小生がこうした事柄を論じたてる人々の間に、しばしばその身を置いてきたことから〕自身もまたかかる事柄につき、あれこれ申し述べることを心得ていると判断するのが妥当であると思いついた次第です。かくしてマキアヴェッリとタキトゥスという二人の著作家をざっと一瞥しましたところ、結局マキアヴェッリが、乏しい認識を踏まえて国家理性の論をこねあげたこと、そしてまたティベリウス帝が、もしC・カッシウスが最後のローマ人でないならローマ人は言うに及ばず、世界のもつとも卑しい女ですら受け入れがたいと感じるような、そのような皇帝の無法その他のやり方で、その専制や残虐さを糊塗していたに過ぎないことを知るに至った次第です²。そ

を行ったが、後にバイエルン公マクシミリアンに破れ廃位される。彼宛の献辞は1590年のローマにおける『国家理性論』の初版及び、1598年のヴェネツィア版に附されている。この献辞の文言は他の版においても、論考の頭に据えられる序論へとかたちを変えながらも維持されているが、その際の宛先は先に挙げた諸版とは異なっている（それは例えば1596年のトリノ版は「ピエモンテ公フィリッポ・エマニュエル殿下」に、1598年のミラノ版では「ミラノ国におけるカトリック王陛下の勅任財務官フェデリコ・キンツィオ氏」に捧げられている）。

² 共和政ローマ末期の政治家ガイウス・カッシウス・ロンギヌス(Gaius Cassius Longinus)のこと。カエサルの専制政治に反対しブルトゥストともにその暗殺を決行したが、ファルサロスの戦いでカエサル派に敗れ自殺。「最後のローマ人」と称せられる。この本行文中は「最後のローマ人」カッシウスの死後、ローマ人が女性化し皇帝の専制を容易に受容するようになってしまったことを意味している

こで小生あきれたのは、このように不敬な作家や僭主のかかる邪悪な手法がかくも高く評価され、それどころか国家の行政統治の枢要に従事する方々の規範とも、理想とも解されているということでもあります。しかしそれに対する驚嘆と言うよりむしろそれに対する羞恥という点において私を突き動かしたのは実に、かかる野蛮な統治法が、言語道断なことに神の法に反している正にそのこと自体の故に、かくも信用を博しているということに他なりません。それがあつた事柄が国家理性の見地から正しいとされている一方で、別のある事柄が道義心の見地から正しいとされていると言われている程なのです。こうしたことにつきこれ以上に不合理でないことを、そしてまた邪悪でないことを語ることは出来ません。なぜなら、公私を問わずあらゆる事柄に関し人間界に通用する万端につき、その普遍的判断を道義心から引き離している者は誰であっても、良心も神も構うものかと考えている人間であることを示しているからです。獣ですら、彼らを有益なことへと押しやり有害なことから引き離す、そのような自然的本能を身に着けています。善悪を見分けることを心得るべく人間に与えられた理性の光や道義心の掟は、公的事柄に関してのみならずであり重大な事柄については不十分なのでしょうか。その動機が羞恥であるかそれとも熱意であるかはわかりませんが、このような輩により統治や君主への助言に差し込まれた腐敗につき小生は、しばしば筆を執ろうと思って参りました。と申しますのも神の教会の内に生じたあらゆる醜聞が、キリスト教界のあらゆる混乱が、そこに根源を有しているからに他なりません。しかしながら腐敗についての小生の考察は、もしそれに先だつて自身が偉大になるために、また人民を幸せに統治するためにある君主が執るべき真実のやり方を示すことがなければ、信用を博したり權威を有したりすることはありませんから、小生としましては「かかる腐敗を示すという」第一の仕事を先に延ばし、少なくとも「君主のとるべき真実の統治法を示すという」第二の仕事を³、威勢囂々たる殿下にお捧げする国家理性についての書

と思われる。但し本行文中カッシウスのファースト・ネームが G ではなく C で示されている理由は不明。

³ この箇所につき 1590 年のローマ版と 1598 年のヴェネツィア版の両版において

において素描することに着手いたします。（自身の才の乏しさに加えて）宮廷の喧噪や宮仕えの繁忙の故に小生は、かかる仕事を色彩豊かにあるいは具体的になし得たと申す勇氣はございません。ただそれが小生の施す修飾以上の修飾を以て世人に流通することを願うことから、それが威勢嚇々たる殿下の御名により飾られることを望んだ次第でございます。と申しますのも（殿下の御家の古き由緒や、いつの世にもそれを飾る聖俗の官爵や権威、そしてまた軍務における殿下の父君並びにキリスト教会における殿下の叔父君アルテンプの枢機卿猥下の高き権威は申すに及ばず⁴）小生は、〔殿下以上に〕国事に関し豊かな知識をもちまたそれを愉しみ、かつ度量の豊かさと深い判断を以てそれを取り扱いまたそれを実行に移している君主を知らないからに他なりません。至尊なる皇帝陛下は殿下に、広大かつ豊饒なる聖俗の国家をお授けにられました。そしてこの国家において殿下はその御年の盛りにあって、その人民を多大なる正義心と信仰心を以て治められ、かかる正義心と信仰心にもとづくやり方で、その峻厳さを甘美さによりまた偉大な手法を懇篤なそれにより和らげられました。その結果として殿下は、臣民から恐れられるとともに愛されるようになられた訳でございます⁵。殿下はかくも稀なあり方で牧者の配慮を君主の威厳と結びつけられましたので、前者〔配慮〕からは臣民の間における崇敬が、後者〔威厳〕からは万人における驚嘆すべき評

は、献辞はここに示された行文とは異なるあり方をしている（他方 1596 年のトリノ版と 1598 年のミラノ版においてはそうではない）。即ち「しかしながら腐敗についての小生の考察は、もしそれに先だつて自身が偉大になるため、また人民を幸せに統治するためある君主がとるべき真実のやり方を示すことがなければ、信用を博したり権威を有したりすることはありませんから、小生としましては〔かかる腐敗を示すという〕第一の仕事を先に延ばし」という部分が削除され、「他なりません」という部分に続き直ちに、「少なくとも〔君主のとるべき真実の統治法を示すということにつき〕ながしかの事柄を、この国家理性についての書において素描することに着手いたします」という文言がはじまっている。

⁴ マルコ・スティッチ・ホーエネムスは教皇ピウス 4 世の甥にして、その姉妹カルラ・デ・メディチの息子。軍人としてイタリア戦争や対オスマン帝国戦においても活躍。1561 年枢機卿叙任。

⁵ マキアヴェッリ『君主論』第 17 章（表題「残酷さと憐れみ深さについて、また愛されるのと恐れられるのとどちらがよいか」）参照。

判が生じたのでございます。かくして [かかる評判が余りに高いものであったので] 遂にはその振る舞いの全てを通じて、殿下が君主としてまた高位聖職者として、その威厳においてどれほどの高みに立っておられるのかと噂された程であります。小生は小生のこのささやかな精進のたまものを殿下にお送りし、それをお捧げするよう小生を突き動かした道理が、御身に備わる寛大さや慰撫さによって、これを受け入れまたこれを笑覧し給うよう、御身をも動かすことを確信しております。恐らく他の者を [畏怖の念により] 引き下らせてしまうような、そのような小生のお捧げする事柄の卑しき自体が、殿下のご芳情に対する深い信頼の念によって小生をして、それを殿下にお捧げせしめるのであります。なぜなら (その点において御神に倣い) 御身にとっては、その慈愛と恩恵によって低きものを高め、小さきものを大きなものとなす事こそが⁶、君主の偉大さに相応しいことであるからに他なりません。威勢嚇々たる殿下が [この捧げ物につき] 十分な満足を得られますよう、御神に祈り上げ、殿下の御手に恭しく接吻をさせていただく次第です。

ローマ、1589年5月10日

威勢嚇々たる崇敬あたわざる殿下の御許に
卑しく従順なる僕 ジョバンニ・ボッテロー

第一巻

第一章 国家理性とは何か

国家理性とは一つの領国を定礎し、保持しまた拡張するため適した手段に関する教えることに他ならない。完全に論じた場合、それは上述の三つの部分に分かたれるが、より限定して言えばそれは他の部分に増して領国を保持することを取り扱い、また残りの二つの部分のうちでは、定礎よりむしろ拡張を取り扱うものであるように思われる。それというのも国家理性は君主や

⁶ 『ルカ福音書』 I-53。

国家の存在を必要とするが、領国の定礎はこうした君主や国家の存在に全面的に先行するものであり、拡張もまた部分的にはそれに先行しているからである⁷。しかし領国の定礎の術策と領国の拡張の術策は同一のものである。と言うのも領国の拡張をなすものは誰であろうと、彼が拡張する当のものたる領国を適切に定礎しなければならないし、その足腰を固めねばならないからだ。

第二章 諸領国の分類

領国にはいろいろな種類がある。それらは蒼古たる領国、新しい領国、豊かな領国その他の種類に分類される。だが我々の意図に話を限定すれば我が領国には有力なものやさほどでもないもの、本来的なものや獲得されたものなどがある⁸。我々が本来的と称するものとは即ち、我々がその臣民の意志の主人であるような領国のことである。こうした臣民の意志は、ポーランドの王の選出に際して生じるように明示される場合も、国家の正当な継承に際して生じるように暗示的に示される場合もある。かかる国家の継承は、明瞭なものもあれば疑わしいものもある。獲得されたものと我々が称する処の領国とは即ち、金銭や等価物との交換により購入されたもの、あるいは武力により獲得されたものがある。武力により獲得される場合には、力づくによる場合と合意による場合がある。領国獲得のための合意には、勝者の裁量により一方的になされる場合と、勝者と敗者の間の取り極めに基づく場合とがある⁹。加えて領国には小さなものや大きなもの、そして中ぐらいのものがある。

⁷ ボッターロの議論における国家の定礎と国家の存続や拡大との厳格な区別と後者の優先は、議論の焦点を新君主による新国家の定礎に据えるマキアヴェッリ『君主論』との対比の上で重要な観点となる。

⁸ このように取り上げる主題を様々な条件に基づき分類し、以後の議論の構図を概観するやり方は、スコラ哲学における議論の進め方として一般的なものであるが、ボッターロが念頭に置いているのはなかならずマキアヴェッリ『君主論』第1章における、以後の議論の概観であろう。

⁹ 1590年のローマ版以降この後に、「獲得にあたっての抵抗が大きければ大きいほど、こうした領国の支配は困難なものとなる」という若干の行文が追加されている。

こうした違いは絶対的なものではなく、隣国同士の比較により生じる。小さな領国とはそれ自身で自身を維持することが出来ず、多国の庇護や支援を不可欠とするような領国のことである。ラグーザ共和国やルッカ共和国がそうした領国の例である。中ぐらいの領国とは即ち、他者の救援を必要とせずとも、自衛するに十分な武力や権威を有しているような領国のことだ。こうした領国の例としてはヴェネツィア人支配者たちの領国[ヴェネツィア共和国]やボヘミア王国、ミラノ公国やフランドル伯領があげられよう。他方我々が称するところの大きな国とは即ち、トルコ帝国やカトリック王の帝国のように、隣国に対して顕著な優勢を保持しているような国である。その他の区別として、ある領国は統一され、ある領国は統一されていないということがある。我々が言う統一された領国とは即ち、その四肢の相互の間に連続性があり、お互いに関連し合っているような領国のことである。他方その四肢が連続体ないしは一体を構成しないような領国が、統一されていない領国と呼ばれる。例えば彼らがファアマゴスタやトレマイデ、そしてファリエ・ヴェッキエ、ペーラ、カッフアの支配者であった頃のジェノヴァ人の帝国や、彼らがエチオピアやアラビア、インドやブラジルに有している諸国を介したポルトガル人の帝国、そして[四海に広がる]カトリック王の帝国がこれにあたる。

第三章 臣民について¹⁰

臣民がいなければ領国は成り立たない。彼らはその性質において落ち着いた臣民と軽々しい臣民がおり、また享樂的な臣民と勇猛な臣民がある。また商業に専念する臣民もあれば軍事に専念する臣民もおり、我々が聖教[カトリック]を信奉する臣民もいれば他の何らかの宗派に属している臣民もいる。何らかの宗派に属している臣民に関して言えば、全く以て不信仰の域に留ま

¹⁰ 本稿が底本とした1598年のミラノ版には本章が欠落している。他の諸版においてこの欠落が全く見られないことから1598年版におけるこの欠落は、印刷業者の不注意が原因であると考えられる。

っているかユダヤ教徒であるか、分離派¹¹であるか或いは異端であるか色々である。もし臣民が異端者である場合彼らは、ルター派であるかカルヴァン派であるか、それともその他同様の不信心者である。更に言えば、これら全ての臣民たちは同一の手段様態によって統合されているか、或いはイスパニア王国におけるアラゴン人とカスティリア人、フランス王国におけるブルゴーニュ人とブルターニュ人のように、異なる手段様態によって統合されているかのどちらかである。

第四章 諸国家の崩壊の原因について

自然物は二つの原因によって崩壊する。その幾つかは内在的原因であり、またその幾つかは外在的原因である。我々が内在的原因と称するものは根源的資質の過剰や腐敗であり、外在的と称するものは鉄や火その他による暴力に他ならない。同じく国家もまた、内外二つの原因により崩壊する。内的原因とは即ちその幼稚さや愚行、魯鈍、名声の喪失などに端を発する君主の無能に他ならない。それは実にいろいろ経路から生じてくる。臣民に対する残虐さや、なканずく高貴で寛雅な人士の榮譽を辱める淫蕩もまた、国家の崩壊を引き起こす内在的要因に他ならない。まさにこのことこそが国王（タルクニウス王）や十人会委員をローマから駆逐したのだし、ムーア人のスペイン侵入もフランス人のシチリアからの追放もまたそれに由来している。その息子が榮譽ある市民の妻と関係をもっていることを知った老ディオニシウスは彼を厳しく叱責し、彼が同じようなことをしたことをいままで見たことがあるかと問うた。それに対し若者は「あなたがそうならなかったのは、あなたが王の息子ではなかったからでしょう」と返答したので、彼はこのように付け加えた。「だとすればお前が生活態度を改めなければ、お前もまた王の父親ではなくなることだろうよ」。

かくして国家は君主の残虐さ以上に淫蕩さによって崩壊すると言ってよいか否かを論じることが、必要となってくる。これに道理をもって答えること

¹¹ 前後の文脈から東欧のギリシア正教徒のことと判断される。

はさして難しいことではない。なぜなら残虐さはそれを行使する者に対する憎悪を生むと共に、彼に対する恐れをも生むものだからだ。その一方で淫蕩さは憎悪と軽蔑を同時に生じさせる¹²。かくして残虐さはこうした残虐さに対する憎悪を生むとともに、たとえ僅かしか持続しないそのために微弱なものとはいえ、かかる残虐さの支えとなる恐怖をも有することとなる。だが淫蕩さは如何なるその支援となるものをも有することはない。というのもそれは、それに立ち向かう憎悪と軽蔑を生じせしめるのみだからである。そればかりではない。残虐さはそれにより攻撃された人物の勢力や生命を奪い去るものだが、淫蕩にはそのような効果はない。国家崩壊の内在的原因として他に、有力者間の嫉妬や競争、不和や野心が、大衆の間の軽薄さや不安定そして恐怖が、そしてまた他国の支配者に対する領主たちや人民の支持と言ったことがあげられる¹³。他方で国家崩壊の外在的原因とは、敵対者の奸計や軍事力に限られる。かくしてローマ人はマケドニア人を破滅させたが、蛮族もまたローマ人を破滅させることとなった。だがこれら内外二途の原因のうち、果たしてどちらがより有害なのであろうか。内在的原因であることは言うまでもないだろう。何故なら外在的力が一国を崩壊させるなどと言うことは、それがそれ以前に内在的原因により腐敗させられていない限り、極めて稀だからである。

これら二種類の単純な原因から混合的とも称し得るいま一つの原因が、臣民たちが敵対者と共謀し、彼らが祖国と君主を裏切る時に生じてくる¹⁴。

¹² マキアヴェッリ『君主論』第19章（表題「軽蔑され、憎まれるのを避けるためには、どうしたらよいか」）参照。

¹³ 1590年のローマ版以降ボッテローは「野心的なばかりで思慮分別のない支配者は、しばしば力の分散により自身の国家を破滅させてしまっている。それは自分で手にし得る以上のものを抱え込もうと欲したからである。こうしたことを我々はアテネ人やスパルタ人の事例において見ることが出来るが、なかんずくマケドニア王ディメトリオスやエピルス王ピュロスの事例がそうである」と、国家の破滅の今ひとつの原因を付け加えている。

¹⁴ マキアヴェッリ『フィレンツェ国を武装化することについての提言』参照。

第五章 国家を拡張すること維持することの、どちらがよりすぐれた仕事であるか

国家を維持することの方が〔国家を拡張するより〕偉大な仕事であることに疑う余地はない。なぜなら人間の仕業というものはその下に置かれている月の満ち欠けと同様に、ほとんど不可避免的に盛衰を繰り返すものだからだ。従ってこうした仕業を維持しあるいはそれが成長している際には、それに遅速が無いよう調節することは特別に値打ちあるし、更に言えば人知を越えた価値を有する事業なのだ。領土の拡張に際しては敵の混乱や他人の仕業などといった、偶然の機会がその大半を占めている。だが獲得した領土の保全はといえば、これはまさに卓越した力能(virtù)の賜物に他ならない。武力によって獲得されたものも叡智によって保持される。武力は万人誰しも共通に有することができるものだが、叡智となればそれをもつこと許されるのは極少数に過ぎない。そのうえ領国を獲得あるいは拡大する者は、国権の衰亡につき外的原因に対処せねばならないだけなのに対して、領国の保持に携わる者はといえば、内外双方の困難に対処せねばならないから一層大変だ。古のラダイケモン〔スパルタ〕人は、自身の領土を保持することの方が他者の領土を獲得することより偉大な業であることを示すため、戦場において剣をではなく盾を失うものを処罰したのであった。またローマ人はファビウス・マクシムスを共和国の楯と、マルクス・マルケルス共和国の剣と称したが、ファビウスをマルケルスより重んじたことは疑う余地がない。同じような見解はアリストテレスもまた、これに賛同するところである。彼はその著『政治学』において、立法者の主要な任務は都市を定礎したり造形したりすることではなく、それが保全されるよう対処することであると言っている¹⁵。スパルタ王テオポンポスは元老院あるいはエロフォイたちの評議会を王権に統合した時、権力を減少させたと彼を評したその妻に向かって、「王権が安泰堅固になればなるほど、それは強大なものになる」と答えたものである。だが獲得する者の方が保持する者よりよりいっそう評価されるということは（何

¹⁵ アリストテレス『政治学』第2巻11章、1272b 3033、同第2巻11章、1273b 21-22

者かはそう言うことであろうが)、いったい何に由来することなのであろうか。その由来を慮るに、支配権を拡大する者はより目立つし、またより人気を博す者だからである。こうした人物はいつそう世を騒がし、いつそうの評判を手に入れる。彼らは世の注目を集めまた新風を巻き起こす。人間というものは何にも増してこうした事柄に親近感を抱き、それに憧れるものなのだ¹⁶。かくして軍事的功業の方が国を平和に維持する業よりいつそう愛好され、また驚嘆されるということが生じるのだ。それを保持する人の判断や知恵によるものであればあるほど平和というものは、評判も新風も呼ばないものなのである。かくして大河は急流より遙かに高貴なものであるにもかかわらず、緩やかな大河の流れよりもむしろ、危険な急流に見とれて足を止める者の方が遙かに多いということになるのと同様に、領土を獲得する者はそれを保持する者より、遙かに高く評価されるということが生じる訳だ。

第六章 より永続するのは大国か小国か、それとも中位の国か

中位の国が保全に最も適しているとは確かなことである。なぜなら小国はその脆弱さの故に大国の暴力や侵害に容易に晒されてしまうからである。それは猛禽が小鳥を餌に、大魚が小魚を餌にその身を養うように、大国もまた小国を食い物にし小国の破滅により自身の威勢を高めるからだ。かくしてローマは周辺の諸都市の犠牲の上に大をなし、マケドニア王フィリポスはギリシャの諸共和国の抑圧により強大化した。大国は周辺諸国の嫉妬や疑惑の的となる。そして合従した諸国は「こうした大国の無法に対抗すべく」単独ではなし得ないことをしでかしてくる。だがそれ以上に大国というものは、衰亡の本来的原因の下に置かれてしまう。というのも強大さによって富裕が生じ、富裕により悪徳や過差、傲慢や淫蕩、貪欲といった諸悪の根源が生じてくるからだ。かくして清貧によりその絶頂へと導かれた諸王国は、その富裕によって損なわれてしまうことになる。それに加えて強大さはそれと共に、自身の力に対する過信をももたらしてしまう。そしてこうした過信が臣民や

¹⁶ マキアヴェッリ『ディスコルスィ』I-53。

敵対者に関して、怠惰や軽侮を産み出してしまうこととなる¹⁷。かくして同様の国家が実にしばしばその現在の価値や基盤よりも、過ぎ去った事柄についての名声によって保持されることとなる。偽金が見た目に黄金と見まがおうと本物との比較によりその偽りがさらけ出されるように、こんな国家はご大層な名声を帯びようと活脈に欠けているのである。それは実は内部が虫食いによって空っぽになっている亭々たる樹木や、スタミナのない巨漢のようなものだ。こんな代物が何であるかは経験が示してくれる通りである。リュクルゴスにより定められた節度の内に止まっていた間スパルタは、その価値と名声においてギリシア諸都市中でも卓越した存在であった。だがその支配権を拡張しギリシア諸都市やアジアの諸王国を支配下に置いた後には、衰退してしまった¹⁸。かくしてアゲラシオスの登場以前スパルタは、敵軍はもちろん戦火をすら見たことがなかったにもかかわらず、アテネ人を打倒しアジアを荒廃にたたき込んだ後ともなると、その市民がテーベ人を前にして逃げ出す様を目の当たりにせねばならなくなってしまった。テーベ人などそれまでは極めて柔弱で、スパルタ人の眼中にも入らない連中ではしかなかったというのに。ところがその同一の連中が今やスパルタ人の大切な田園地帯に侵攻し、あまつさえその城下を除いてはあらゆる狼藉に及んだのだ。ローマ人もまたカルタゴ人を飼い慣らすや、14年にわたってヌミディア人を恐れ続けた。数多くの王たちにうち勝ちまた数多の属州を支配下に置いたにもかかわらず、彼らは14年にわたりスペインではビリアトゥスによりルシタニアではサルトルリウスにより、イタリアではスパルタクスによりさんざんな目に遭わされ、四方から包囲され、海賊たちには食糧補給を断ち切られる有様となった。その力量(valore)が困難の途上で彼らに偉大さへの道を切り開いたにもかかわらず、かかる力量は偉大さに到達するやいなや富裕に絡め取られ、悦楽に

¹⁷マキアヴェッリ『フィレンツェ史』Vには、「このように常に良好な状態から悪しき状態に陥り、悪しき状態から良き状態へと復帰する。なぜならば有能さは静穏を生ぜしめ、静穏は安逸を、安逸は無秩序を、無秩序は滅亡を生ぜしめ、また同様に滅亡からは秩序が、秩序からは有能さが、有能さからは栄光と幸運が生じる」と記されている。

¹⁸ マキアヴェッリ『ディスコルスィ』I-6, II-3 参照。

氣力を削ぎ取られ、好色により柔弱とされてしまった。それは海のただ中で恐ろしい嵐を凌ぎ、空恐ろしい暴風を乗り越えたにもかかわらず、港の中で遭難座礁してしまうようなものだ。彼らには豪壮な思考が無く、卓越した計画もなく、荣誉溢れる起業もなかった。その代わりに彼らは傲慢さや尊大さ、野心や大官の貪欲、大衆の定見のなさなどに燃え上がってしまったのだ。もはや将軍たちに好意が示されることはなく、それに代わって道化師が人気をさらった。兵士がではなく漫才師が、真実ではなく追従が受け入れられたのだ。もはや力量(virtù)ではなく富裕さが、正義ではなく目先のことが重んじられるようになった¹⁹。単純さは詐略に、純良さは悪意にその場を譲った。かくして国家が強大になるに従ってその堅固さの基は逆に崩落して行くことになる。鉄がそれ自身を飲み込む錆を産み出したり、熟した果物がそれ自身によって、それを駄目にしてしまう蛆虫を湧き出させてしまうことに似ている。つまり大国はそれを徐々にあるいは時には一挙に没落へと突き落とし、また自身を敵の餌食と化してしまうような、なにがしかの悪徳を自身で作ってしまうのだ。大国についてはこれで充分説明したことと思う。

対するに領土的に中位の国にはより永続性がある。なぜなら過度の脆弱性故に暴力に直面することもなければ、過度の強大さ故に他者の嫉妬を買うこともないからだ。そして富裕さや権勢が緩和されているため、欲情は依然として猛烈ではないし、野心はその助けとなるものをあまりもつことが無く、淫蕩も大国における場合程それが燃え盛ることはない。そして近隣諸国の疑惑はこうした中位の国を、手綱の内に押し止めてしまう。そしてたとえもし人民の性情が揺れ動き掻き乱されたとしても、ローマの事例が示すようにこれを容易に沈静化することができる。その国勢が中位のものである間ローマにおいては、争乱はほとんど長続きしなかったし、国外の戦争が生じるやびたっと治まってしまった。何にせよその時代のローマでは争乱は、流血の惨を見ることなく落ち着いたのだ²⁰。ところが一方で国勢の強大化が野心にその道を開き、党派がこの国に根を下ろし、他方外敵がいなくなり、戦争

¹⁹ マキアヴェッリ『ディスコルスィ』I-18, III-16 参照。

²⁰ マキアヴェッリ『ディスコルスィ』I-4 参照。

[即ちマリウスによるヌミディアとキンブリ族に対する戦勝やスラによるギリシアやミトリダテス王に対する戦勝、ポンペイウスによるスペインやアジアでの戦勝そしてガリアにおけるカエサルの戦勝のことである] とそこから生じる戦利品により、属国や名声そして自己保存の手段を獲得するや、ローマ人たちはかつての争乱時のように互いに家財道具によって争い合うのではなく、実際に戦火を交えるようになってしまった。このように騒擾と戦乱は、敵対し合う諸党派のひいては帝国そのものの荒廃によってしか、止むことが無くなってしまった。かくして我々は、超大国より比較的中位の国の方が長続きするのを確認することができた。スパルタやカルタゴ、なかんずくヴェネツィアの事例がその証拠となる。この国に関して言えばその中位性が堅固なものである間は、そこに領国などというものは存在しなかった。だが国家の中位性はその拡大によりもある領国の保全に適したものであるにもかかわらず、その支配者たちがそれに自足せず、中位であるよりもより強大に更に言えば最強になろうと欲するが故に、中位の国家が存続することはほとんどない。この場合、中位性の限界を超え出ることによって、こうした支配者たちは安全性の境界をも越えてでしてしまうのである。このことこそがまさにヴェネツィア人に生じたことだ。彼らはピサにおける作戦とルドヴィコ・スフォルツァに対する同盟によって、中位性が要求する以上のものを掻き込もうとした。その結果この国は破滅の淵に立たされてしまったのである。しかしもし君主が中位性の限度を心得それに自足するなら、その支配権は永続することとなるであろう。

第七章 統合された諸国家と分裂した諸国家のどちらがより長続きするか

分裂した諸国家には二通りの種類がある。即ち一つはその間に、強大な敵対したないしは敵対の恐れのある支配者たちが介在しているため、いざという際に互いに助け合うことができないような分裂諸国家。いま一つはいざというときに互いに支援しあえるような分裂諸国家だ。後者には三通りの手段がある。即ち第一は金の力によるものだが、これは最も困難な手段であろう。

第二にそこを通過せねばならぬ国の君主の同意によるもの、そして第三にはその支配領域の全ての部分が海に面しているため、海軍力により容易に自衛が果たせるものである。加えて分裂した支配領域の諸部分は、そのそれぞれが近隣諸国の侵略に対して単独で自衛するには余りに脆弱であるか、周辺諸国と比して卓越しているかせめてそれと対等で、ある程度には強大・強勢であるかのどちらかである。

また小生はこうも言いたい。即ち強大な帝国が敵の攻撃や侵入に対して、そうでない場合に比べいっそう安泰であることは疑う余地がないと。なぜならこうした帝国は強大かつ統一されており、統一はそれ自体で一段の堅固さや勢力をもたらすからである。だがその一方で強大さは自信をもたらし、自信は油断を、油断は軽侮や名声や権威の喪失をもたらさずにはおかない。また権勢は富を産み出すものだが、この富こそが悦楽の母となり、悦楽こそがあらゆる悪徳の母となるのだ。まさにこのことがその極盛の内にあつて、諸国が失墜する原因となる。なぜなら権勢の増大に従って国民の価値が摩耗し、富の充溢に応じてその力量(virtù)が失われてしまうからだ。アウグストゥス帝の御代、ローマ帝国はその全盛期を迎えていた。ティベリウス帝の時代既に、悦楽と淫蕩がローマの美德(virtù)を押しつぶしはじめていた。その後こうした傾向は、カリギュラ帝やその他の皇帝たちの時代にも受け継がれた。だがヴェスパシアヌス帝はその人間的価値により、ローマの美風のなにごしかを保持することができた。しかしドミティアヌス帝がその悪癖により、それをすっかり台無しにしてしまっている。もっともトラヤヌス帝や彼に続く若干の皇帝たちの善良さが、こうした美風をその原初の状態に引き戻すことに成功している²¹。その後こうした美風は次第に、その最終的荒廃へと押し流されて行ってしまった。そして時にこうした美風がしっかり立つよう助けられ支えられたりしたとしてもそれは、ローマ人の人間的価値によってではなく、外国出身の皇帝たちや将軍たちのお蔭なのであった。皇帝たちに関して言えばトラヤヌス帝はスペイン人だったし、アントニウス・ピウス帝はフ

²¹ マキアヴェッリ『ディスコルスィ』III-1 参照。

ランス人、セブミミウス・セヴェルス帝はアフリカ人、アレクサンデル帝はマメオ出身であり²²、クラウディウス帝はダーダルネス地方出身であった。アウレリアヌス帝はモエシア出身、パウルス帝はシルミウム出身、ディオクレティアヌス帝はダルマティア人だった。ガレリウス帝はダキア人、コンスタンティヌス大帝の父コンスタンティウス帝はダーダルネス人、帝国の修復者と称されたテオドシウス帝はまたスペイン人であった。なにがしかの才能を示した将軍たちについても同じことが言える。彼らのうちでスティリコやウルデスあるいはアエティウスはヴァンダル人であり、カスティヌスはスキティア出身、ポニファティウスはトラキア人、アラン人の王ベーオルゴルを撃破したリキメルはゴート人であった。ここからローマの美德(virtù)が悦楽により台無しにされ、外国人の助けがなければ足でしっかり立つことも、頭を上げることもできなくなるほど、腐敗してしまったということがわかる。なぜなら蛮人の奉仕など欲得づくの私的な意図がからみ、しばしば反逆や不実を避けることができないものであったから、結局のところ帝国は全面的に崩壊してしまったのである。それというのも内的価値を有さない帝国など、敵対者の奸計や攻撃から長らくその身を守るなどできないからだ。かくして全面的に腐敗墮落していたスペインは、僅か30ヶ月でムーア人の手中に落ち²³、コンスタンティノープルの帝国は数年でトルコ人に制圧されてしまった。そればかりではない。もし統一された領国において諸侯の間に争乱が生じたり、人民の間に一揆が起こったり、両者の間に放埒が生じたとするなら、あたかもペストやその他の伝染病のように、その場所の近接故により健全な部分にまでそれが広がってしまうことになる。もし君主が安逸その他の由無し事に身を委ねたとすれば、また意気地に欠け、墮落の極みに身を落とすならば、統一国家は結果として分裂国家より一段と安易に、敵対者に対し

²² シリア出身のアレクサンデル・セヴェルス帝(位222-235)のこと。彼のその生母ユリア・アヴィタ・ママエアに支配されたが、このママエアという名こそがこの部分におけるボッテローの錯誤の原因となった。それにもかかわらずボッテロー自身は、ランプリディウスの著作を通じて、この皇帝の一生に通暁していたし、ママエア自身にも8巻4章末尾で言及している。

²³ 711年の西ゴート王国滅亡のことを指す。

脆弱になってしまう²⁴。

反対に分裂国家は、一体となっている外敵に対しては〔統一国家に比べ〕より弱いものだ。なぜなら分裂が弱体化をもたらすものであることは言うまでもない。もし諸部分が全体としてかくも不健全なら、各部分もそれ自体隣国の攻撃に対して無力なものになってしまうし、このように分裂しお互いがお互いを支援できないなら、そのような領国が永続できるはずもない。だがもし互いが互いを支援することができ、侵略を恐れることがない程に各部分が強大かつ勇猛であるなら、こうした領国を統一国家に比し安定していないと評することはできない。なぜなら相互に支援し合えるのであるから、前者のような国を分裂した国と称することは全くできない。だがその本質においても統一した国に比べ、このような国は脆弱ではないどころか、いくつもの利点を有している。なぜなら、第一にそれが一時に掻き乱されることがないからである。ある地域が他の地域から更に離れた場所にあれば、こうした懸念はいっそう小さくなる。何となれば多くの地域が統合されることが困難であるならば、一人の支配者がこうしたこと〔多数の地域を一挙に掻き乱すこと〕を行うことはできないだろうから。そこから次のことが引き出されてくる。即ち、こうした国の一部分が攻撃されても、他の安寧を保っている部分は、紛擾に巻き込まれた他の部分を救援することができるだろうということである。それはポルトガルが何度もそのインドの領地の救援に駆けつけたことからわかる。さらには諸侯の不和や人民の一揆はそれほど波及する訳ではない。なぜならある地域の党派は他の地域を支配しないからだ。親族関係や友好関係、従属関係や庇護関係は〔一つの地域に納まり〕他の地域へはさほど波及することはない。だから支配者にとって彼に忠実な部分を使って、反抗する部分を処罰することは容易なことであろう。また分裂した帝国においては他の類の腐敗も同様に、統合された帝国のようには他の地域まで素早く、また強い衝撃力をもって広がることはないだろう。というのも分裂は無秩序が広がる経路を阻むし、諸地域の距離的間隔は〔事物の普及に〕時間的

²⁴ 侵略者に対する統一された国家と分裂した国家の抵抗力の相違については、マキアヴェッリ『君主論』第4章参照。

間隔を挟み込むから。そしてこうした時間的間隔は正統的支配者や正義に有利に働く。なんとなれば外的条件が、内的条件により未だ腐敗していない国を損なうことは、滅多に起こることではないからだ。「内的不和により事前に弱められていない限り、たとえそれが如何に小さな国であろうとある国が、外的に打ち破られることはない」とは、ヴェージェツィウスの言うところである²⁵。上に論じたような二つの条件から小生は、統合された領国と比べた時、分立した領国をより不安定で永続し難いものとは考えない。スペイン王国がこの例にあたる。なぜならこの王冠の下に属す諸国はそれぞれ十分な力を持っており、近隣の武力に由来するどんな騒擾にも驚く騒ぐことがないからである。ナポリやシチリアの場合と同様に、フランス人が空しく攻撃し続けてきたミラノやフランドルが、そのことを証立てている。だから、諸領国がお互いに離ればなれであるにもかかわらず、これらを分裂しているとは全くもって評することはできない。なぜならこの王冠が豊かに有している金銭が全面的に役立っているのに加えて、こうしたスペイン傘下の国々は、海によって互いに結びつけられているからである。その一方神慮によって、フランドルの場合を除いてイギリスからの攻撃に対してどの国も、救援に駆けつけることができない程離れている訳でもない。カタロニア人やバスク人、ガリシア人やポルトガル人は海事に卓越しているから、まさに彼らは航海の支配者と称してもよいくらいだ。従ってこうした人々の手中にある海軍力は、さもなくば分裂し一体をなしていないかのように観じられる帝国を、統合されたほとんど連続的なものと評さしめるほどである。それは今やポルトガルとカスティリアが合体したからには尚更である²⁶。これら両国は前者は西方から東方に向かって、後者は〔東方から〕西方に向かって進み、フィリピン群島の地点で遭遇し合う²⁷。この長大な旅路の途上、彼らはあらゆる島々や諸王

²⁵ ウェゲティウス『戦争論』(De re militari) III-10

²⁶ 1580年にスペインのフェリペ2世は、ポルトガルのエンリケ1世の没後に同国とその海外植民地をスペインに併合した。

²⁷ 1494年6月7日にスペインとポルトガルの間に結ばれたトルデシヤス条約に基づき、西経46度37分の子午線の東側の新領土がポルトガル領、西側がスベ

国、諸港を発見しその支配下に置いた。なぜならそれらの土地は領国になるか、彼らに友好的な支配者たちや彼らの被庇護者や同盟者の領土だからである。

第八章 国家保全の策

国家の保全は臣民の静謐と平和にかかっている。これを損なう要因には騷擾と戦争という二種類がある。なぜなら御身は御身自身の民か〔騷擾〕あるいは外人によって〔戦争〕掻き乱されるからである。また御身は御身自身の民により、二通りのやり方で苦しめられることであろう。というのも御身の民はその相互の間で戦い合うか、君主に立ち向かってくるかどちらかだからである。前者は内戦と称され、後者は一揆とか謀反と呼ばれる。ところでこの二通りの不都合は、次のようなやり方で回避できる。こうしたやり方によって支配者は臣民から、愛情や名声を獲得できるのである。なぜならそれが産み出されるそのやり方によって自然の事物が保持されるのと同様、国家の保全の原因と国家の定礎の原因は同一のものだからに他ならない。かの太初の時代に人々が王たちを推戴し、君主国あるいは彼ら自身の統治をある他者に委ねようとしたことは、間違いがない。人民がそうした気持ちに動かされたのは、彼らが抱いたこうした人物に対する愛情や、彼らがこうした人物に対し下した高い評価（我々はこれを〈名声〉と呼んでいる）故に他ならない。この愛情と評判こそが、人民をして君主に対する従順や平和へと導くのだと言っても過言ではない。だが王が選出されるにあたって、愛情と名声のどちらがより大きな決め手となったのであろうか。それは名声だと断言できる。なぜなら人民は、こうした人物を喜ばせたり彼らに好意を寄せるため国家の政権を他者に委ねるのではなく、共通善や公共の福利のためにそうするのだ。だから親切で愛すべき人物ではなく、彼らがそこに価値と徳を見出す人物が、

イン領と定められた。その後マゼランの世界一周の成功により地球球体説が実証されるに及びトルデシヤ条約を補完するため 1529 年 4 月 22 日に、東経 144 度 30 分の子午線より西をポルトガル領、東をスペイン領とするサラゴサ条約が締結された。但しフィリピンはこの子午線より西に位置するにもかかわらず、スペイン領とすることがこの条約により確認されている。

王として選出されることになるのである。そこでローマ人たちはその危難に際して指導権を、彼らが好意を抱く実績不確かな若者ではなく、マンリウスやパピリウス、ファビウスやデキウス、カミルスやパウリウス、そしてスキピオやマリウスといった老熟した経験豊富な人物に委ねた。従来カミルスは人々から憎悪され、その結果ローマ人たちから追放の憂き目にすらあわされていたのに、彼が必要となると呼び戻され、独裁官に任じられた。M・リヴィウスは人民より度々軽侮され糾弾され、長らく同郷市民たちの眼前で不名誉の淵に沈んでいたが、いざ国難来たるとなるや、人民の愛情や好意を取りつけんものと、野心に駆られ努力を重ねた手合いを尻目に、執政官に任じられ、ハンニバルの兄弟と対峙すべき将軍に抜きん出られたのであった。L・パウルスがマケドニア戦役に、マリウスがキンブリ戦役に、ポンペイウスがミトリダテス戦役に召喚されたのもまた、彼らが揺き立てる名声ゆえのことであった。同じくこうした名声こそがヴェスパシアヌスやトラヤヌス、そしてテオドシウスをして、ローマ帝国の皇位へと導いたのだし、ピピンやユーグ・カペーをフランスの王位に²⁸、ゴットフリードその他の人物をエルサレム王の地位へと引き上げたのであった。

だが愛情と名声の間に存する差異は、一体どのようなものなのであろうか。どちらも〈力量〉に由来するものであることは明らかだ。だが愛情の獲得には凡庸な力量があれば充分であるのに対し、名声の獲得はそれには止まらぬ、卓越した力量を不可欠とする。従って、ある人物の善性と長所が月並みを越えある一定の明徴に達した時、彼が善良な人物たるが故に、その本性において愛すべき人物たろうとも、にもかかわらず大抵の場合に愛すべき性格は、その人格の卓越により圧倒されてしまう。こうした卓越を備えている者は誰であっても、かかる卓越故に愛される以上に高く評価されることになるのである。そしてもしこうした評価が宗教心や敬虔さに基づくものであれば、それは通常には〈敬意〉と称せられ、それが政治や戦争の力能に基づくものであれば一般に〈名声〉と称される。それ故に君主がかくも神々しいまでの卓

²⁸ カペー家は 987 年から 1328 年までフランスに君臨した王家。ユーグ・カペーはその初代王である。

越性を有する場合には決まって、彼がその統治法において愛されるのに適した事柄は、同時に彼が名声を獲得するにあたっても適した事柄となるのである。公正さ以上に愛すべき事柄があるだろうか。カミルスにおける公正さの卓越は、かの学校教師がその生徒たちを彼のもとに引き連れてきた時、ファレリーの城門が彼の前に開かれる程の名声を、彼にもたらしたのであった²⁹。またピュロス王に王を裏切った医師を送り届けたとき、ファブリキウスの公正さは王を賛嘆と驚愕の念で満たし、戦争を放念した彼をして、ローマとの平和の締結へと向かわしめたのである³⁰。正直以上に何が愛すべき事柄であろうか。にもかかわらず、かの美女に手をつけず彼女を夫のもとに送り届けた時、P・スキピオのこれほどの卓越した行為は彼を愛すべき人物とした以上に、驚嘆すべき人物とした³¹。そしてこのことは同時に彼をして、万人のもとでかくも評価や名声に満ちた人物としたその故に、彼はスペイン人たちにとってあたかも、天より下った神であるかの如くに観じられたのである。

第九章 支配者には徳の卓越か如何に不可欠であるか

諸国家の礎は臣民のその君主に対する服従である。そしてかかる服従は、君主の力量〔美德〕に基づくものである。と言うのも、諸要素やそれにより構成される諸物体は、それらの性質の高貴さを通じ、大した障害もなく諸天界の運動に従い運動している。諸天界の間においても、より低い天はより高い天の動きに随順している。同様に人民もまた、その内に力量の某かの卓越を輝かす君主に自ら進んで服従する。なぜなら彼より卓越した存在に服従したり、その下に配置されることを恥じる者などないからである。だが自身より劣ったり、あるいは自身と対等な者に服従したり、その下に配置されることについてはそうではない（Nec quemquam iam ferre potest Caesarumque

²⁹ マキアヴェッリ『ディスコルスィ』III-20。マキアヴェッリのこの行文は、リヴィウス『ローマ史』v-27を出典としている。

³⁰ 注14と同じくマキアヴェッリ『ディスコルスィ』III-20を参照。

³¹ マキアヴェッリ『ディスコルスィ』III-20及び『戦争の技法』VI-30。リヴィウス『ローマ史』XXIV-50を典拠とする。

priorem, Pompeiusquem parem.)。

しかし大事なのは次のことである。即ち支配者の偉大さは、不似合いなあるいは些細で如何なる顕著さをも欠く物事に存するのではなく、心気を昂揚させるような物事に、もっと言えば天上的なあるいは、神聖な偉大さをもたらす物事に存しているのだということに他ならない。そうした物事はある人間を他の者より、いっそう卓抜とした人間にしてしまう。なぜなら(リヴィウスも言うように)「忠誠の紐帯はより卓越した者への随順にかかっている」(vinculum fidei est melioribus parere)からであり、またディオニシウスの言によれば「劣等者が優等者に服従すべきだということは、天然自然の永遠の理法である」(aeterna naturae lege receptum est, ut inferiores praestantibus pareant)からだ³²。またアリストテレスは自然の理法から、その資質と判断力において他者に卓越した者が、君主となるべきだと考え、貴族たちは重んじられるべきだと言っている³³。なぜなら貴族性とは家柄血統に由来するある種の力量[美德]に他ならないからである。彼によれば良きものから良きものが、より良きものからより良きものが生じる蓋然性は極めて高い³⁴。それゆえ僭主にとり良き者は悪しき者に比べより疑わしい者であるし、高貴な者は陋劣な者に比しより疑わしい者となるのである。なぜならその力量[美德]から見てその任に堪えない地位を窃取しているが故に、かかる僭主は本来その任に堪え得るかかる良き尊き者たちに対して、当然恐れを抱くようになるからである。

第一〇章 支配者の徳の卓越には二つの様態がある

こうした卓越には絶対的なものと部分的なものの二種類がある。絶対的卓越とは、万事につきないしはあらゆる力量につき、凡庸の域を超えている人々のそれである。他方部分的な卓越とは即ち、あるいくつかの特定の力量(美

³² ハルカルナッソスのディオニシウス『ローマ古代誌』I-5。

³³ アリストテレス『政治学』III-13, 1284b 29-35; III-17, 1288a 15-20; VII-3, 1325b 7-10。

³⁴ アリストテレス『政治学』III, 1283b 35-39; V, 1309。

徳)に関して、もっと言えばまさに統治者のそれに関して、他に立ちまわっている人々のそれである。第一の即ち絶対的美徳の班に入る人々として我々は皇帝たちの内では、コンスタンティヌス大帝やコンスタンス帝、グラティアヌス帝、テオドシウス帝、ユスティヌス帝、ユスティニアヌス帝(彼が単意論者でなければのことではあるが³⁵)、ティベリウス2世、賢帝レオ、ハインリッヒ1世、オットー1世(彼が不当にも叙任権を僭称しなかったとした上でのことではあるが³⁶)、オットー3世、ルードヴィヒ2世、ジギズムント帝、フリードリッヒ3世、カール5世、フェルディナント帝を挙げることができよう。フランスの王たちにおいてはクロヴィス王、カール・マルテル(彼は王位に昇ることはなかったが)、ピピン、カール大帝、賢王シャルル、ロベール、ルイ7世及び9世が挙げられよう。また偉大なスペイン王たちの間においては、最初のカトリック信者の[西]ゴート王たるリカレード[1世]、ペラジオ、カトリック王アルフォンソ(彼がこう称されるのは、スペインにおいてアリウス派信仰を根絶したからである)、アルフォンソ純潔王、ラミーロ、アルフォンソ大王、アルフォンソ7世、サンチョ(彼はあたかも、彼が「世の愛的」と称せられた如く、スペインにおいて「待望者」と称されたかのティト帝の再来と目された。それはこの両者が[世人の愛的となりつつも]短命で、したがってその統治もきわめて短期間だったからに他ならない)、アルフォンソ8世、アラゴン王ヤーコボ、フェルディナント3

³⁵ 宗教政策的にユスティニアヌス帝は正統的なキリスト両性論者であり、ボッテローの記述は理解に苦しむ面もあるが、他方6~7世紀のローマ皇帝たちが帝国のイデオロギー的統一性の維持のため、広範に普及したキリスト単性論者との妥協に苦慮していたことは事実である。こうした妥協の産物として提出されたのがキリスト単意論であり、少なからぬ東ローマ帝国の皇帝たちの支持をも得ていた。ユスティニアヌスに対する「単意論者でなければ」というボッテローの評論は、このあたりの複雑な宗教政治を踏まえているのかも知れない。

³⁶ 教会に世俗所領の寄進が増えるに従い、その管理をめぐる叙任権の問題が帝権／教権双方の対立の焦点となりつつあったのは事実であるが、この問題が両者間の抜き差しならぬ対立を引き起こしたのはオットー1世よりはるかに後、グレゴリウス7世の教会改革を契機としてである。この点においてもボッテローの識見に何らかの錯誤があるように思われる。

世、カトリック王フェルディナントを挙げ得よう。卓越した力量〔美德〕を備えた教皇たちとしては、(教皇シルヴェストロ以降では) ユリウス1世、ダマソ、イノケンティウス1世、大教皇レオ〔1世〕、ペラギウス、グレゴリウス1世及び彼の後継者ボニファティウス4世、ヴィタリアヌス、アデオダートゥス、レオ2世、その生活の聖性から〈天使教皇〉と称されたコノン、コンスタンティヌス、グレゴリウス2世と3世、ザカリウス1世、ステファヌス2世、ハドリアヌス1世、レオ3世、パスカリス1世、貧者の教皇エウゲニウス2世、レオ4世、意に反して推戴されたベネディクトゥス3世、自身の意に反し不在時に教皇位に推戴されたニコラウス1世、ハドリアヌス2世、ヨハネス4世、レオ9世(彼は皇帝ハインリッヒにより選出されたため一私人としてローマに入城し、その後に人民により正規の手続きに従って教皇位に選出された)、ニコラウス2世、その不在時に選出されたアレクサンデル2世、教会の自由とそれ以前皇帝たちに抑圧されていたローマ聖座の権威を確立したグレゴリウス8世³⁷、不信心者たちへのかの英雄的遠征〔第1回十字軍〕の主唱者たるウルバヌス2世、素意に反し選出されたパスカリス2世、カリストゥス2世、アナスタジウス4世、教会分裂や皇帝フリードリヒに対し堅忍不拔を示したアレクサンデル3世、クレメンス3世と4世(後者はその甥が、複数の聖堂参事会員職を保有することを許さなかった)、その生活の清廉潔白と習慣の謙虚さにより「一徹者」(il composito)と称せられたニコラウス3世、自身の素意に反し選出されたニコラウス5世がいる。

³⁷ 明らかにグレゴリウス7世の事績と混同されている。